

# JOYAMA NEWS

vol. **42**

2018 Summer

Joyama 通信  
福岡教育大学広報誌

University of Teacher Education Fukuoka  
Campus Magazine

特集

## 福教大女子学生 リアル座談会



国立大学法人

福岡教育大学

02 特集  
 新カリキュラム×学生ボランティア活動

08 教員紹介&  
 学生から見た先生の魅力について

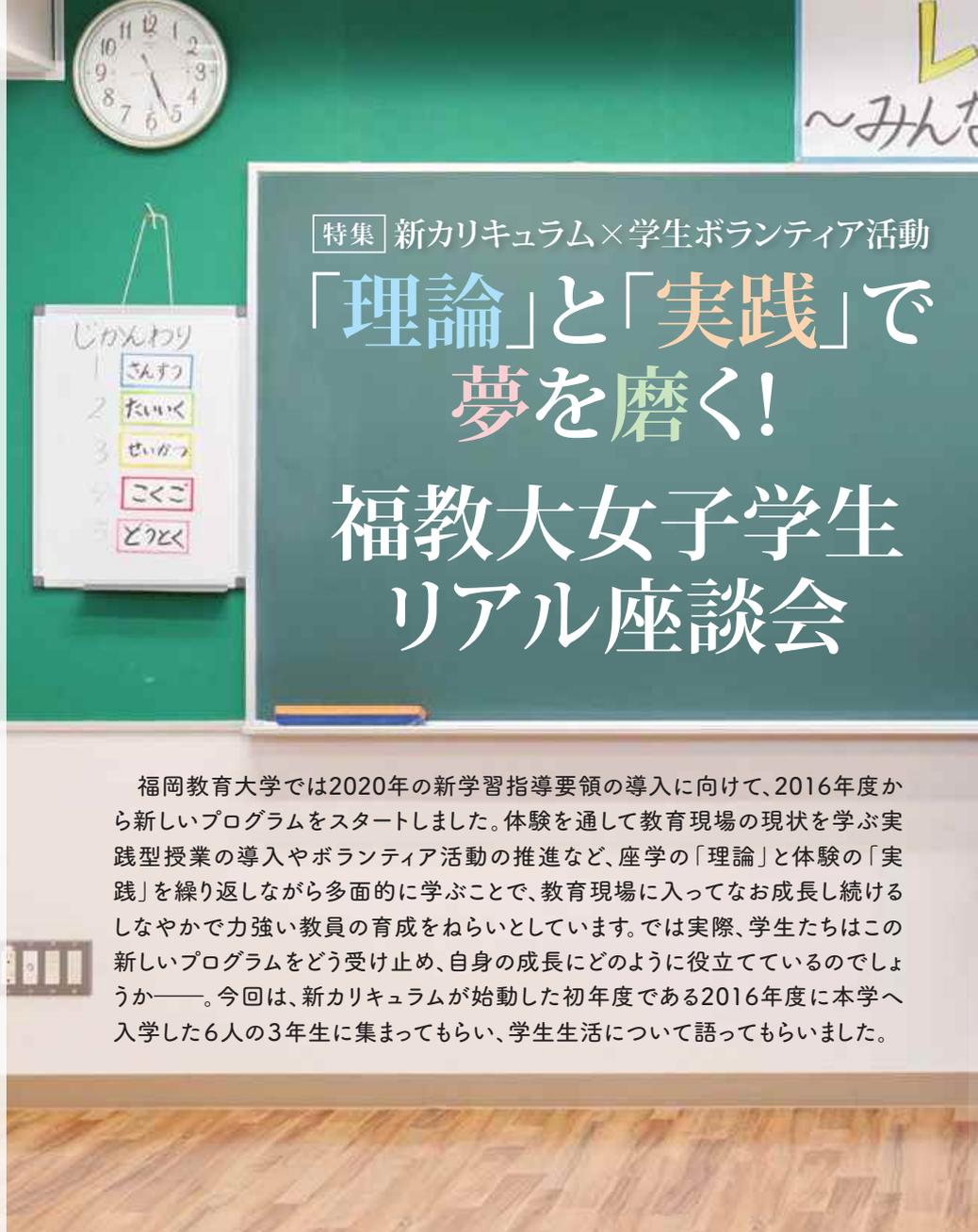
10 福教大NEWS

12 サークル紹介  
 サッカー部  
 こぼとの会

13 第19回 福教大卒OB&OG紹介  
 筑後市立松原小学校教諭  
 横尾 美尋さん

14 TOPICS  
 学生による学生のための消費生活  
 研究会の活動が始動しています  
 表紙モデルの福教大生  
 福岡教育大学基金のご案内

15 キャンパスからの便り



特集 新カリキュラム×学生ボランティア活動

# 「理論」と「実践」で 夢を磨く!

## 福教大女子学生 リアル座談会

福岡教育大学では2020年の新学習指導要領の導入に向けて、2016年度から新しいプログラムをスタートしました。体験を通して教育現場の現状を学ぶ実践型授業の導入やボランティア活動の推進など、座学の「理論」と体験の「実践」を繰り返しながら多面的に学ぶことで、教育現場に入ってなお成長し続けるしなやかで力強い教員の育成をねらいとしています。では実際、学生たちはこの新しいプログラムをどう受け止め、自身の成長にどのように役立っているのでしょうか——。今回は、新カリキュラムが始動した初年度である2016年度に本学へ入学した6人の3年生に集ってもらい、学生生活について語ってもらいました。

### 福岡県内という立地、 恩師の出身校、失敗からの選択… 高校時代の大学選び

——皆さんは現在大学3年生ですが、高校生の頃、志望大学をどんなふうを選びましたか？



**小田** 私は地元が福岡なので県内の大学から志望校を絞りました。親は面と向かっては言わないけど私にそばにいて欲しいのが分かるし、経済的にも国公立の方が親孝行になるだろうな、夢が幼稚園の先生ってということもあり、だったら福教大かなって。ただ、納得して選びたかったからオープンキャンパスは高校2年生、3年生と2年連続で行きました。

**米倉** 私もオープンキャンパスは2回行った！福教大は、自分が教師を目指すきっかけになった小学校の頃の担任の先生と高校でいちばん信頼していた先生、恩師2人の出身校だったので興味を持ちました。

**中舩** 私は地元が広島で、実は第一志望校は別の大学でしたが前

期試験に落ちてしまったんです。ショックでしたが、それをきっかけに第一志望校へのこだわりより、「教育を勉強したい」という自分の強い気持ちに気づきました。だから後期の志望校選びで考えたのは「入学したらどんな環境で学べるか」ということ。福教大を選んだ理由は3つです。①講義に実践的な科目があること、②英語のコミュニケーション能力に特化したELI講座（英語習得院）の存在、③ボランティア活動が盛んなこと。教育をオールマイティに学べそうだなという期待が持てました。



### 安全な方法でまきを割るには？ 体験の学びを軸に子供たちを指導

——今、中舩さんのお話しに出た「実践的な科目」ですが、福教大は2016年に新しいカリキュラムを導入しました。新カリキュラムの特色は、座学の「理論」に教育現場で体験的に学ぶ「実践」を盛り込んだこと。皆さんは新カリキュラムが始動した初年度の入学生ですが、これまでどんな実践型授業を選択しましたか？



初等教育教員養成課程3年



さかい あい  
**坂井 愛**

「人と関わる仕事が好き」という思いが教職を目指したきっかけ。子供野球チームのお手伝いや通学合宿などボランティア活動と合唱部の活動を両立



ゆう き ち ひろ  
**結城 千裕**

ご両親ともに先生で楽しそうに仕事に向き合う姿を見て同じ道へ。ボランティア先で初めて子供たちに「先生」と呼ばれたときは「むずがゆかった(笑)」



おだ まき  
**小田 真紀**

中・高時代の夢は幼稚園の先生。小学校教諭に切り替えたものの、大学で学ぶうち「もっと広く教育を学びたい」と意欲が湧き現在は幼稚園教諭の授業も選択中



よね くら かな  
**米倉 加奈**

学習支援、自然教室スタッフなどボランティア活動の参加数は随一。「学生のうちに1年生から6年生まで全学年の子供たちとたくさん関わっておきたいから」



な か ま す ま こ  
**中舛 真子**

学習意欲が高く「学ぶことが好き」。英検準一級を持っている。現在は副免の国語の中学校教員免許の取得を目指しており、卒業後は教職大学院へ進学を希望



ゆき た な の み  
**雪田 菜海**

お母さんが実施する食育NPO活動に高校時代から参加。「子供が主体、主語が子供、学校全体のそういう雰囲気づくりに貢献できる先生になりたい」

**雪田** 2年次の授業で「体験活動の指導法」を選択しました。「体験活動」というのは小学校5年生で行うキャンプなどの宿泊体験のことで、自然教室の指導に必要な知識と技術を学びました。具体的には、まず3日間の集中講義、それから自然の家で1泊2日の体験授業。最後に小学校の自然教室にボランティアスタッフとして参加しました。



確認していきました。

**雪田** そのとき同じ場所で、ある小学校が自然教室を行っていたんですが、見学していて結構びっくりしました。子供たちに指導していたのは地域の方だと思うんですが、教え方が自己流というか危なっかしくて……。例えば、まき割りでは腰の安定した姿勢からナタを振り下ろす方が安全なのに「立って割りなさい」とか、本来の安全な方法と

は逆のことを教えていて。正しい知識がないまま指導にあたるってこんなに危ないことなんだ…と目の前で見てよく分かりました。

**結城** 授業の仕上げとして八女市のある小学校で3泊4日の自然教室にボランティアスタッフとして参加させてもらいました。講義を受けて、自分で体験したうえで臨んだので「こうしたら火が着くよ」「テントを貼るときはこうだよ」と自信をもって指導できたのがよかったです。



米倉 どうしてその方法がダメなのか、その理由まで子供たちに説明できました。例えば、まき割りで利き手に手袋をしている子がいたら「ナタを持つ方の手に手袋をしたら手が滑って危ないでしょう？だから手袋はまきを持つ方にするんだよ」とか。

## 1クラス4人「島の小学校」訪問や現場で聞いた不登校への取り組み

——「九州地域の教育フィールド研究」も2年次の実践型授業ですよ。 「学力向上」「いじめ・不登校」「離島・僻地」等から興味のあるテーマを選んで現場を訪問する授業ですが、どんな学びがありましたか？

米倉 私は「離島・僻地」を選択しました。福岡県の小学校の過半数が単学年という現状を聞いて、自分が教師になったとき1学年1クラス、先生も学年に1人だけという状況が考えられるので、子供の数が少ない小学校ってどんな感じだろうと興味が湧いたんです。私が行った島の小学校は1学年が3～4人くらい、子供同士の縦のつながりの強さを感じました。1学年が40人くらいの学校だと別の学年とはあまり接点がないと思うんです。学年の違う子供同士が関係し合えるのはいいなあと思いました。

——反対に、課題だと感じたところがありましたか？

米倉 アットホームな反面、子供たちの中にやや慣れ合いの雰囲気があるのかなと感じました。授業と休み時間の区別がついていないような様子があったり、先生に対する言葉遣いや距離感が近すぎるような部分も…。

——小田さんは島の小学校で、放課後の学習支援ボランティアの経験がありますよね。子供たちと先生の距離感はどうでしたか？

小田 私が伺ったのは米倉さんが行った島よりさらに人数が少なくて全校で子供が10人。校長先生も「先生との距離が近すぎるのが

課題」と仰っていて、たしかに、先生に何か注意されても笑って受け流すというか、あまり深く響いていないのかな…という印象はありました。

米倉 善し悪しは紙一重という感じで良いところもたくさんあるんです。例えば運動会は、子供の数が少ないから、保護者をはじめ子供がいない方も参加する島民みんなの「島の運動会」。私たちも参加させてもらいましたが、地区ごとに競い合ったりしてすごく盛り上がって楽しかった。こういう交流があるから、島の人みんなで子供を育てようという温かい雰囲気があるし、子供たちものびのび成長していけるんだなあと思いました。

——なるほど、運動会楽しそうですね。「学力向上」「不登校」のテーマではどんなことをしましたか？



結城 教育委員会や小学校を訪問して、学力向上に向けた具体的な取り組みを聞きました。例えば、私がボランティアでお世話になっている遠賀郡のある小学校では時間を設けて、子供たちが苦手な科目を勉強します。思い返してみると、自分が小学生の頃もそういう時間があったんです。「あれは学力を底上げするねらいだっただ」と点と点がつながりました。

雪田 私は「不登校」をテーマに選びました。北九州市では教育委員会を訪問、福岡市では「えがお館（福岡市子ども総合相談センター）」に伺い、不登校の子供たちをケアしている先生から話を聞くことができました。それまで不登校問題について座学では学んでいましたが、現場では子供一人ひとりに合わせた個別の対応が行われていて、その細やかさに驚きました。



## 現場の若手教師と本音で語る

### 「学級づくりちゃぶ台トーク」

——ほかに印象的な選択授業はありましたか？

**結城** 「学級づくりの理論と実践」という選択授業の卒業生による「学級づくりちゃぶ台トーク」が面白かったです。現役の先生方数名に来ていただくんですが、一方的に話を聞く講義ではなく、1人の先生を数人の学生で囲む、ざっくばらんなトーク形式。少人数だから学校の現状とか気になるところを質問しやすかったです。

——どんな質問をしましたか？

**小田** 「夜は何時くらいまで仕事をしていますか？」と質問しました。「早い時は19時くらいで帰るけど、いろいろしようと思うと23時になることもある」と言われて、みんな「ああやっぱり…」って(笑)。

**中井** それと似ていますが、教職のつらさと楽しさの割合をたずねたら、「7～8割がつらさで、楽しさは2割」。すごくリアルな答えですよ。でも先生は「子供の成長を目の当たりにすると苦労は全部報われる。8割に勝る2割があるから私は頑張れるんだよ」と続けられたんです。大変な仕事だけど、やりがいもすごく濃い仕事なんだなあと思いました。

**坂井** 私は「先生は黒子」という言葉が印象に残りました。「教壇に立つのは教師だけど、クラスの主演は子供たちだよ」と聞いて、子供たちが主体的にやれるように、見えないところで誘導できる先生ってすごいと思って。うまく舵は取る、でも船長じゃない、船長は子供たち。そういう考え方は大事だなと思いました。



## 子供と接するボランティア活動 楽しさの反面、直面する不安も

——実践型授業やボランティア活動を通して、教育現場の現状や子供たちに接してきた皆さんですが、大学に入学した時と比べて何か意識は変わりましたか？

**小田** 大学に入った当初は「今から4年間学んで教師になるぞ」という希望ばかりでした。1年次にボランティアでサマーキャンプのお手伝いをしたのが最初の現場体験でしたが、20数人の子供たちと向き合ってたへたへたに。それでも「やっぱり子供たちと関わるのって楽しい!」という気持ちの方が大きかった。でも、何度もボランティアに行くうちにシビアな部分も見えてくるようになりました。子供たちがワートと騒ぎ始めると結構すごい迫力なんです。担任の先生はその騒ぎを1人でパパッと治めるんですが、はたして自分にこんなことできるのかな…とか。現場を知るほど「私はこんな大変な仕事に就きたいのかな、本当に先生になりたいのかな…」という不安が出てきて、2年生の頃は「不安な気持ち」と「やっぱり楽しい」の間を行ったり来たりの迷いがありました。

**結城** 不安な気持ち、私も分かります。先日、いつもボランティアに行っている小学校の先生から「あなたが海外視察に行ったときのことを子供たちに話してほしい」と授業をする機会をいただきました。教壇に立って子供たちに1時間の授業をするのは初めて。パワーポイン



トで資料を作って、家で何回も何回も練習して本番に挑んだのに、結局思ったようにはいきませんでした。視察に行ったミャンマーのインターナショナルスクールではいろんな人種の子がお互いの違いを認め合いながら関わり合っていた。私たちも同じだよ、友だちは自分と違っているけどそれでいいんだよ、ということ传达了かったけどなかなか……。大人に話す要領では伝わらないし、子供の目線、理解度に合わせて話しをするむずかしさを実感しました。

**雪田** コミュニケーションのむずかしさを感じることもあります。ボランティア先で子供に「今日うちのお母さん、帰りが遅いんだよ」と言われて、「そうなんだ、何時頃来るかな」と返すものの、それ以上は踏み込んでいい部分とそうじゃない部分があるから先の会話が自然にできなくなったり…。

**坂井** 子供は大人をよく見ていて、ズバッと刺さることを言うてる子もいます。それが本来の姿というか、「子供ってそういうものなんだな」と感じることはとても多いです。以前、「通学合宿」といって子供たちが公民館などに1週間くらい泊まり込んで、食事を作ったり宿題をしたり、みんなで生活を共にしながら学校に通う取り組みにボランティアで参加しました。3つの町の通学合宿に行ったんですが、同じ年頃でも地域性みたいなものがあって、地域によって学習意欲の導き方も工夫が必要なんだなあ…と思ったり。

**雪田** 教師になりたい、教育に携わりたいという気持ちは変わらないけど、ただ大学を卒業するだけでいいのかな、もっと経験を積みたい、いろんなことを学びたいと思うようになりました。

**米倉** 子供たちに関わるほど不安も生まれるけど、その不安を拭うにも場数を踏むしかないと思う。教育実習はあるけど、知識だけ詰め込んで経験はゼロの状態できなり教育実習に行ったら何ができるんだろうって。講義とボランティア、知識と実践を行ったり来たり繰り返したうえで教育実習に行く方が吸収できることも多いんじゃないかなと私は思っています。

**小田** 大変だけど、ボランティアって楽しいし。

**米倉** 楽しいよね。私は大学に入るまで1回もボランティア活動をしたことがなくて、「ボランティアといえば…募金活動？」くらいのイメージでした。今は「ボランティア」と聞けばすぐ「学習支援」が思い







浮かぶ。子供たちと関わることで、さらに子供が好きになって、「やっぱり先生になりたい」って思える。残りの大学生活もたくさんボランティアに行きたいと思っています。

## 私たちが今描く理想の教師像 高校生だった自分に言いたいこと

——夢を抱いて福教大に入学して、現場を知ることで教育のやりがいとシビアさの両面を経験しました。3年生の今、どんな理想の教師像を描いていますか？

**結城** 叱ることも大事な教育だと思います。自分の感情で怒るのではなく、その子の次につながるように叱る。教師は言葉で導く仕事だから言葉が大切だけど、今の自分には語彙力が足りないし表現も上手じゃない。でも、下手でも気持ちを伝え続けたら子供は変わるかもしれない。子供の役に立てるような先生になりたいと思っています。

**中舛** 私はずっと学び続ける教師でありたいです。学びはストイックな部分も多いけど、子供と同じ世界にいるというか、子供と一緒に成長しようともがき続けることが大事なのかなと思っています。

**小田** 私も常に学ぶことを忘れない先生になりたい。大学の授業で聞いた「子供一人ひとりに寄り添う」という言葉が私の中にすごく残っていて、そのためには一緒に学んでいく姿勢が大事だと思うから。「教師だから何でも知っている」と気を張る必要はなくて、「先生も分からないことあるんだよ。だから一緒に考えていこうね」という先生がいてもいいんじゃないかなあと私は思います。

——今、高校時代の自分と話せるとしたら、どんな言葉をかけてあげたいですか？

**米倉** 「子供は意外としっかりしているぞ」と言いたい。こうだよと教えているとき「先生、それ違うんじゃない？」と返されることがあって、子供の指摘で気づかされることも多いからです。「子供だから導いてあげないと」ではなくて、子供から学ぶ部分もたくさんある。考

えを人に押し付けないこと、それは子供に対しても同じだよ、「子供をなめるなよ」って言いたいです。

**中舛** 受験のことにに関してですが、「受験を頑張ることが自分のストックになるよ」。前期試験に失敗して、不安を抱えながら後期試験に向かった時期は本当に苦しかったけど、あとき踏ん張ったことで粘り強くなれました。今は壁に直面しても「大丈夫、私はあの時期を乗り越えたんだから」って思える。受験の苦しい経験は無駄じゃないよと言ってあげたいです。

**雪田** 「何事も自分の目で確かめてみて」と言いたいです。人の話を聞くこと、本や資料を読むことも大事だけど、人が話したり書いたものにはどうしてもその人の主観が入るから自分がどう思うかはまた別だと思う。大学に入ってそういう経験をたくさんすることができました。「どんなことも、まずは自分の目で見て確かめて、どう思うかは自分しただいよ」ということを昔の自分に伝えたいです。

**坂井** 私は「迷ったらやってみよう！」かな。遊びたいとか、一時の感情に流されて「もういいか」ではなくて、今やっておかないと後悔することがあるから「迷ったらやってみよう！」。

## 福教大を目指す高校生の皆さんへ

——最後にこれから福教大を目指す高校生の皆さんにエールをお願いします。

**小田** 福教大のいちばんの魅力は教育に特化した学びの環境だと思います。講義には理論と実践が盛り込まれているし、ボランティア活動の情報など提供してくれる熱い先生方もいらっしゃる。そして、周りには同じ目標を持つ仲間がたくさんいます。教員免許を取るための4年間ではなくて、自分はどんな先生になりたいのかを考えたりの悩んだり、共有できる環境がある。だから、同じように先生を目指す皆さんにも「福教大は自分を高められる良い大学だよ」と自信をもって言えます。自分が理想とする先生を目指して一緒に頑張りましょう！

# 教員紹介 & 学生から見た先生の魅力について

美術教育講座

教授 和田 圭壮

出身地: 広島県  
最終学歴: 福岡教育大学  
大学院修士課程  
取得学位: 修士(教育学)  
本学着任: 1994年



## 手書き文字の重要性を理解した教育者に

### 専門の研究テーマについて

書写書道教育を専門領域としており、小・中学校国語科書写及び、高等学校芸術科書道の教科指導方法について研究しています。中でも、書写教育では、「書写」と「習字」の違いから、本来求められる「書写」教育では、どのような力を身につけるべきであるかを明らかにしつつ、硬筆と毛筆の関連に着目しながら実践的に研究しています。書道教育では、鑑賞教育に重点をおいて研究しています。特に、芸術科の目標に掲げられている「感性を高め」「豊かな情操を養う」の文言に着目し、書道の授業において、感性や豊かな情操を養うことを意図的に計画し実施するには、どのような授業方法がよいのかという視点で研究を進めています。

### 大学教員に進むことになったきっかけについて

私は、福岡教育大学の出身で、学部生の時は、高校の書道教員を目指していました。4年生の時、採用試験は不合格でしたが、本学大学院修士課程美術教育専攻が設置されることになり、運良く大学院一期生となることができました。大学院での学びに没頭する中で、次第に大学教員という職業も考えるようになりました。

### 研究成果の教育への還元について

先述のように、私の研究領域は教科指導法ですので、その研究成果は、教師をめざす大学生への教育に還元できていると考えています。特に、求められる出前授業には、積極的に出向き、小・中・高等学校の子どもたちの実態をつかみながら、より実践的でかつ理想的な授業のための研究を目指しています。



出前授業(筑後地区の小学校)の様子

### こだわりの物・考え・モットーについて

こだわりの物は、熊野筆です。私自身が、筆の町「熊野」(広島県安芸郡熊野町)の出身なので、購入する筆は、熊野筆と決めています。

我が子が小学生・中学生の時、PTA活動に微力ながら力を注いだ経験から、ボランティア活動の意義、重要性を自分なりに実感させてもらいました。人のために行動ができる人材の育成を心がけて、学生と接しています。

### 福岡教育大学で学ぶ学生に一言

ICT機器が発達している現代において、未だ黒板にチョークで書く「板書」の能力は、教師にとって身につけるべき重要なスキルです。多くのデジタル黒板は、未だ教室の黒板サイズではありません。デジタル黒板が、教室の黒板サイズになり、かつ日本全国どの教室にも設置されたときに、チョークの終焉であると思っています。それはまだまだ先のことではないでしょうか。板書のチョーク技法を身につけましょう。



教育者育成専門科目「板書指導」の授業の様子



和田教授と和田ルーム所属の学生達

### 学生から見た先生の魅力について

おおし あさこ  
大橋 阿佐子さん

はらだ かおり  
原田 佳織さん(中等教育教員養成課程 書道専攻4年)

和田先生は、芯のある情熱的な先生です。特に学習指導案に対して熱心に添削してくださる姿がとても印象的です。また、些細な悩みや愚痴を親身になって聞いてくださる、父親のような存在で、ルーム生はみんな先生が大好きです。そんな先生には、大の広島東洋カープファンという一面があり、たくさんのグッズをお持ちです。1コマ1コマの授業に全力をそそぐ、先生のような教師になりたいです。お体を大切にしてください。

# アクティブな生活を すごそう

国語教育講座

やまもと えつこ  
教授 山元 悦子

出身地:山口県  
最終学歴:広島大学大学院  
教育学研究科博士課程後期  
取得学位:博士(教育学)  
本学着任:1993年



## 専門の研究テーマについて

私の専門テーマは国語教育です。児童生徒の言葉を育て、言葉を使って思考する力を育てるにはどうすればよいかを追究しています。なかでも、言語コミュニケーション能力の成長過程の究明に興味があり、その育ちを促す実践の開発を行っています。



教育総合研究所 研究プロジェクト発表

## 大学教員に進むことになった きっかけについて

恩師の一言です。私は広島大学教育学部出身ですが、学生が自主的に立ち上げた(らしい)「広島大学国語教育研究会」に所属していました。年に一度発表会があったのですが、大学3年生の時にそこで発表したとき、恩師の野地潤家先生から、発表がよかったから大学院に進学しませんか、と声をかけられたことがきっかけです。野地先生は、私にとって研究者の権化のような人であり、また、学生に対して本当に真摯に向きあってくださった人でもありました。今思い返せばたいしたことない発表でしたから、私への一言は馬の鼻づらににんじんのなねらいがあったのかなと思います。けれども、野地先生の生き方や学生に対する処し方は、今でも研究や私が学生の皆さんに接するときの指針となっています。

## 研究成果の教育への 還元について

研究の内容が教育実践の開発ですから、現場の先生と一緒に試みた教育実践(国語の授業)を学生の皆さんに示し、啓発を心がけています。

## こだわりの物・考え・モットー について

絵本のコレクターです。講演などでも、宝の地図の絵柄のキャリーケースに、人の心を癒やす絵本を詰めて紹介して回っています。モットーは、愛用しているシステム手帳の扉に記したこの言葉です。

〈何をなしたとて、人の仕事に多少の苦勞はつきものです。まして創作的に道をたどる方々には、苦勞が倍加、三、四倍加するわけです。そこにこそ人生の意義があるのだと思います。〉  
『国語教育易行道』芦田恵之助

## 福岡教育大学で学ぶ 学生に一言

「経験は人を育てる」といいます。何でもできる四年間、いろいろな人と出会い、様々な体験をしましょう。何が皆さんのやる気スイッチを入れるかはわかりませんから。

試しに、図書館にある「子ども図書室」に行ってみませんか。そして絵本や児童文学や図鑑を手にとってみましょう。皆さんの心に新しい世界が拓けるかもしれません。



子ども図書室でルーム生と大型絵本を読む



山元教授と山元ルーム所属の学生達

## 学生から見た先生の魅力について

山元先生は、優しく話やすく学生思いの先生です。先生は、実習時の教材開発や教採時の集団討論の練習などいつも面倒を見てくださり、本当に感謝しています。また、怒るべきところはちゃんと怒ってくださる方でもあります。そんな先生のルームは雰囲気すごく良く、食事会も先生が率先して企画して下さいます。学生同士の言語コミュニケーション活動を大事にされる先生のように、アクティブラーニングを多く取り入れた授業ができる先生になりたいです。

ふじた けんご

藤田 健吾さん(初等教育教員養成課程 国語選修4年)

## 平成29年度研究プロジェクト成果報告会を開催

教育総合研究所では、6つの研究部門において教員養成や現職教員の研修等についての研究プロジェクトを実施しています。平成29年度は、国立大学法人の第3期中期目標・中期計画期間の2年目が終わる年です。そこで、研究が一区切りとなるプロジェクトの研究成果を発表し、本学の教育研究の質の向上について考える機会とすべく、平成30年3月19日、福岡教育大学学生会館2階大集会室において、ポスターセッション形式で報告会を開催しました。

発表者と参加者が活発に質疑を行い、大学におけるアクティブラーニングの展開、いじめ問題の解決に資する小学校授業実践の研究、

映像教材の開発に関する研究、現職教員の研修体系についての調査研究など、各プロジェクトの研究成果について、意見交換を行うことができました。成果報告のポスターは、図書館・教育心理棟入り口の掲示板上に掲示していま

す。今後も、教育総合研究所において、教育課題の解決に資する研究プロジェクトを推進して参ります。

発表者	研究テーマ
磯部 年晃 准教授	教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業
大坪 靖直 教授	いじめ根絶アクションプログラム
熊谷 亮 助教	教育実習時における聴覚障害学生のサポートニーズの検討
貫名 英之 教授	教育実習における実習への不適応要因の検討とその対策
大和 淳 教授	学生の学校理解と能動的学修を支援する映像教材のプロトタイプ開発
山元 悦子 教授	対話的・協働的問題解決学習を通して教師に求められる資質・能力の育成を図る大学授業の開発



清水教育総合研究所長による開会挨拶  
(左は大坪副所長)



成果報告会の様子



閉会の挨拶を行う大坪教育総合研究所副所長  
(左より大坪副所長、清水所長、磯部准教授、櫻井学長)

## タンザニアで野球指導ボランティア (JICA大学連携事業)

平成29年8月に締結した独立行政法人国際協力機構(以下、JICA)との覚書に従い、本学学生7名がボランティアとしてタンザニア連合共和国に派遣されました。

平成30年2月21日に福岡を出発した彼らは、タンザニアスポーツ評議会及びタンザニア野球ソフトボール連盟の要請のもと、現地滞在中のシニアボランティアと共に、学校を拠点に野球技能やスポーツマンシップの向上に関する指導を行いました。

小学校4校(対象:10~12才)では、特別支援クラスの子も達との交流をはじめ、初心者向けに野球の紹介、野球の面白さを伝える活動を行い、中等学校3校(対象:14~17才)では、初心者向け指導、及び、経験者対象には、基礎練習、ノック、ポジション別練習等を行いました。

先日は現地テレビ局(ITV)の番組で、また、WBSC(世界野球ソフトボール連盟)のHPでも活動が紹介されました。



現地で考案した野球型ゲームで試合



中等学校での指導



小学校での指導



現地TV(ITV)のインタビューを受ける様子

## 3 本学海外短期研修UW-L Culture & Education Short Stay Programを実施しました!

平成30年2月27日～3月20日の3週間、本学の協定校の1つであるウィスコンシン大学ラクロス校で「UW-L Culture & Education Short Stay Program」を実施しました(学部生13名、大学院生1名が参加)。

本プログラムは、「Survival English 生きた英語」を学習することだけでなく、アメリカの幼稚園、小・中・高等学校、大学といった様々なステージの授業観察を通して、アメリカの教育制度を体験的に触れる経験を得ることを目的としています。本プログラムでは、事前学習として、実施担当教員や過去に本プログラムに参加した先輩学生から話を聞きながら、現地で自身が学びたい内容や発信したい日本の文化や教育制度を英語でまとめます。そして、プログラム中には、現地の教育機関やホームステイ先のご家庭でその内容を実践し、帰国後にはそ

のフィードバックとして学んだ内容や今後の課題を1つの「ポートフォリオ」にまとめます。更に、本プログラムに参加したこれまでの学生の中には、その後長期留学を行う学生もいます。

### ★参加した学生の声(抜粋)★

- ・自分の伝えたいことはなんとなく話すことができるけれど、聞き取りが全くできなかった。
- ・子どもたちが外国の文化や習慣などを、英語を通して学び、子どもたち自身の将来に対する考え方や視野を上げられるような授業をしたい。
- ・(様々な民族的背景を持つ子どもたちが)その民族的背景に関係なく、一緒に勉強している姿を見ることができた。
- ・留学にも前向きになり、将来は海外で働くという選択肢もあることに気付いた。

・何気なく生活している日本の良さや優れている面なども改めて実感できた。

自身の英語が思っていた以上に通用したと感じた学生もいれば、できなかったと感じた学生もいました。また、現地の教育機関では、日本の学校現場との違いを感じた学生や日本文化の発信に満足した学生もいました。どの体験も、学生それぞれが感じた特有の体験・学び・課題であり、自身の将来の教員像や夢にとって大きな学びになったことでしょう。帰国後は、本プログラムで得た特有の経験や課題点を生かせるよう、日々の学習や実践に励んでほしいと期待しています。



ウェルカムパーティでUW-L学長と



ホストファミリーへ肉うどんレクチャー

## 4 全学一斉の防火・防災訓練を実施しました。

本学赤間キャンパスでは、平成30年5月29日に、震度6強の地震が発生したことを想定した全学一斉の防火・防災訓練を実施しました。

本訓練は今年で8回目を迎え、約1,000名の学生、教職員等が参加しました。参加者は地震発生のアナウンスと同時に身の安全の確保、避難場所への避難や避難完了の報告、初期消火訓練など、一連の訓練に緊張感を持って臨みました。

訓練終了後、宗像地区消防本部から「年々、質が上がっており、訓練の成果が出ているように感じた。将来、みなさんが教員となった際に役立つよう、真剣な態度で訓練に臨んでほしい。」との講評をいただきました。また、櫻井学長から「実際に地震が発生した場合は、大雨や地割れが発生していることもありえる。このよ

うな訓練時にできないことは、災害発生時にもできないと思った方がよい。本学学生は在学中においても、学校ボランティア等で子どもたちと接する機会が多い。訓練を機に普段から災害時の避難先等を意識するようになってもらいたい。」との総括が述べられました。

また、毎年、訓練開始と同時に送信される安否確認メールの返信率は、年々上昇し、今年は過去最高の70%を超える返信率となりました。本学では、来年度以降も、返信率100%を目指し、安否確認メール返信率及び防災意識の向上に取り組むとともに、より実践的な訓練となるよう改善に努めて参ります。



避難場所へ避難した学生と教職員



総括する櫻井学長

# サッカー部

初等教育教員養成課程 2年

いし ざわ しゅう すけ  
石澤 秀介

私たち『サッカー部』は、プレイヤー23名、マネージャー4名の計27名で活動しています。

現在、年間を通して行われる九州大学サッカーリーグに向けて、週6日間練習を行い、リーグ戦がない週は練習試合などを行っています。4年生を中心に練習メニューを考え、九州大学サッカーリーグ1部昇格に向けて活動しています。

また、デッドコール・クラマーカップの審判やサニックス杯国際ユースサッカー大会の運営、幼稚園サッカーの審判など、サッカーを通して地域との携わりを深めています。



昨年度の実績は、九州大学サッカーリーグ1部で10位でした。1部残留を目標にしつつも、2部に降格してしまったため、その悔しさを忘れずに、再び1部で戦えるようチーム全員が向上心を高く持って日々の練習に取り組んでいます。時には、お互いに厳しい声を掛け合い、チームメイト同士で高め合っています。

これからも私たち『サッカー部』は、サッカーを通して社会で立派に活躍できる人間性を養いつつ、一人一人が競技力向上を目標に頑張っていきます。応援よろしくお願いします。



## サークル紹介

C I R C L E I N F O R M A T I O N



# こぼとの会

特別支援教育教員養成課程 初等教育部 2年

かさ はら さ わ こ  
笠原 佐和子

私たちが所属している『こぼとの会』とは、十数年前まで本学の療育の一環としてあった【こぼと学級】にいられていたダウン症の子どもたちやダウン症の方々と、そのご家族、本学の学生が、共に様々な経験をすることを目的として発足された会のことです。

現在、特別支援教育教員養成課程の2年生がスタッフを務め、『こぼとの会』に所属している学生や一般参加学生と活動しています。【こぼと学級】にいられていた方々に加え、日本ダウン症協会福岡支部の子どもたちやそのご家族も参加されています。

私たちは1年間を通して、ハイキングやキャンプ、クリスマス会など、季節ごとに計6つの行事を行っています。自分たちで考えたレクリエーションを公園で行う、キャンプで2泊3日子どもたちと過ごす、制作活動や発表会をするなどが活動内容です。子どもたちにより多くの経験をしてもらい、楽しんでもらえるように様々な活動を企画しています。また、私たち自身、ダウン症の子どもたちとの触れ合いや行事準備等を通して、多くのことを学ぶことができ、とても充実した時間を過ごしています。

これからも、子どもたちと安全に、楽しく、元気に活動していきますので、温かく見守っていただくと嬉しいです。





子どもからのサプライズプレゼント

## 「先生、来年もまた担任してほしいです。」

教師になり、今まで言われた中で一番心に残っている言葉です。小学校の時の恩師に憧れ、教師になって3年目。正直、楽しいことや嬉しいことばかりではありません。「私が担任でいいのだろうか…」「どうしてもっと笑顔が増えるのかな」「私は、教師にむいていないのではないだろうか…」と悩むこともあります。しかし、その時できる最大限の力を子どもに注ぎたいと思い、奮闘する毎日です。その気持ちが少しでも子どもに伝わった時、笑顔が見られた時、子どもの成長を感じた時などに「教師になってよかった。」と心から思います。

## 私の強みとは

教師になって、多くの先生と出会いました。その中で、どの先生にも“強み”があります。その強みを生かした学級経営を見させていただく中で、私の強みとはなんだろう…と考えるときがあります。

私は、幼いときから習字を習い、大学では書道科に在籍していました。この強みを小学校でどのように生かしていこうかと考えているばかりですが、「文字を書くのが好きになったよ。」「先生の書写の授業、楽しいね。」と言ってくれる子どもがいます。これからの教師生活の中で、もっと私の強みを生かしたクラスを創っていきたいと思います。

## ふり返って思うこと

大学時代を思い返すと、もっと沢山のことを経験しておけばよかったと思います。例えば、ボランティア活動を通して、いろんな学校を見たり、友達といろんなところに旅をしたり、いろんなバイトを試してみたり…。多くの経験をすることでいろんなことが学べ、その学びは教師になったときに必ず役に立ちます。自分のやりたいことに自由に時間が使える今、大学生の皆さんには様々な経験を積んでほしいと思います。



初任者研修 道徳の授業(教員1年目)



筑後地区小学校社会科教育研究会の授業(教員2年目)



入学式 子どもの出会い(教員3年目)



卒業記念展「ここから」の作品の一枚(大学時代)

筑後市立松原小学校  
よこお みひろ  
教諭 横尾 美尋さん

平成28年3月  
中等教育教員養成課程  
書道専攻卒業



# 学生による学生のための 消費生活研究会の活動が 始動しています

平成29年度より、「福岡県消費生活センターと大学サークル等自主活動の連携による啓発事業」を貴志倫子教授(家政教育講座)が受託し、初等および中等教育教員養成課程で家庭科を専門にしている3年生8名が「消費生活研究会」を立ち上げ活動を始めました。

学生ならではの視点で身近な消費トラブルの事例や解決法について調査や情報収集を行ったり、消費生活センターなどから講師を招いて研修会を行ったりし、学修成果を様々な形で発信しています。一つは、SNSによる発信(消費生活研究会@UTEF)で、フォロワーの数も徐々に増えています。また大学生協のご協力を得て、生協主催の入学準備説明会で「Enjoy学生生活!」と題しメンバーが交代で啓発のプレゼンテーションを行いました。平成

29年12月以降14回の説明会で、多くの新入生やその保護者に聞いて頂きました。さらに、新入生向けの消費生活の啓発パンフレットを作成し、大学の協力を得て、平成30年度入学生全員に配布しています。

平成30年4月17日、19日にはメンバーがミニワークショップを開催し、活動に関心をもった1、2年生17名を新メンバーに迎えることになりました。始まったばかりの活動ですが、ピア・ラーニングのさらなる輪の広がりが期待されます。



作成した学生向けの消費生活啓発パンフレット



平成30年4月17日開催のミニワークショップの様子

## 表紙モデルの福教大生

今回の表紙は、特集の座談会で、授業やボランティア活動、理想の教師像などについて語り合った、初等教育教員養成課程3年生の皆さんに登場していただきました。

今回の座談会を終えて、「私はたくさん素晴らしい経験をしている仲間にも困っているんだなぁ〜と改めて思いました。また、そういう仲間がいるからこそ『私もまだまだ頑張らなくちゃ!』と鼓舞されました。残りの学生生活で、様々な経験を積み、教師になるために必要な力を身につけたいです。」や「今回の座談会を通じて、周りに自分と同じ夢を持った心強い仲間がいることを実感しました。これからも主体的に授業やボランティアから多くのことを学び、将来自信を持って教壇に立てる教師になりたいです。」などコメントをいただきました。



## 福岡教育大学基金のご案内

福岡教育大学では、教育研究の更なる発展や充実を図ることを目的として、「福岡教育大学基金」を設けております。つきましては、広く教育界、産業界、地域の皆様方に、本基金への格別のご理解とご支援を末永く賜りたく、お願いを申し上げます。

公式ホームページ

福岡教育大学基金

検索

[https://www.fukuoka-edu.ac.jp/about/efforts/foundation/fukkyou\\_foundation](https://www.fukuoka-edu.ac.jp/about/efforts/foundation/fukkyou_foundation)

「福岡教育大学基金」についてのお問い合わせは、福岡教育大学財務企画課までご連絡をお願いします。

お問い合わせ先

福岡教育大学財務企画課 TEL:0940-35-1210 FAX:0940-35-1701 E-mail:kaihosa@fukuoka-edu.ac.jp

# Campus Letter

キャンパスからの便り

## 同窓会城山会 第43回定期総会報告

平成30年4月29日に第43回定期総会を八仙閣本店で開催いたしました。

総会には城山会顧問の先生方の参加を賜り、福岡県28支会及び長崎県、佐賀県、山口県、宮崎県、熊本県の5支部の会員160名が集いました。懇親会は、学長をはじめ先輩同窓会や大学支援委員等多数のご来賓のご臨席を賜り交流を深め、支部・支会づくりの糧となるひとときでした。



城山会 第43回定期総会 会長 太田 勝視

福岡教育大学同窓会 城山会事務局  
TEL・FAX:0940-33-2211  
E-Mail:jouyamakai@able.ocn.ne.jp

## 後援会 平成30年度保護者説明会のご報告

今年度の県外での保護者説明会は、平成30年6月2日の大分から始まり、広島、熊本、長崎の4ヶ所で行いました。大学から就職・教職教育院についての説明があり、その後学年毎に分かれて懇談会をしました。懇談会では保護者同士の情報交換や要望などを参加者で共有することが出来ました。



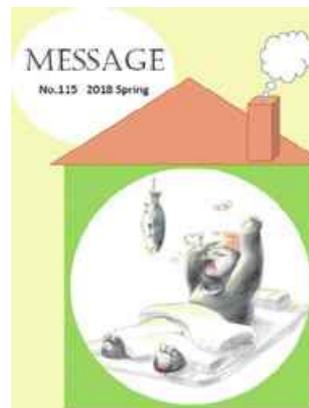
来年は、宮崎、鹿児島、佐賀、山口で開催の予定です。ぜひご参加ください。

福岡教育大学後援会事務局  
TEL・FAX:0940-33-8070  
E-Mail:kouenkai@eos.ocn.ne.jp

## 健康科学センター MESSAGE No.115 2018 春号

今回の内容は、「意識が高い?or意識高い系?」「至福の時間をクリエイイトする~私の心安らぐ一時~」「仕事も遊びも楽しもう!」「思い込み」をなくすと心が軽くなる」「アイデンティティ(自我同一性)」「新生活を始める方へ」「どうしてお腹がへるのかな?」など盛りだくさんです。また表紙は中等美術専攻の図師秀男さんのデザインです。是非手にとってご覧ください。

健康科学センターHP  
<http://ww1.fukuoka-edu.ac.jp/~hokenctr/index.html>



## 福岡教育大学の 広報ポスターを作成しました

先生が何を考え、何を思い、何を背負って教壇に立っているのか、等身大の先生の気持ちを親近感の湧くメッセージに込め、高校生が「先生」を目指すきっかけや学校現場の先生方への応援メッセージになればと思い、本学の卒業生にモデルとして協力いただき作成しました。

今後、本学ホームページ、JR教育大前駅ホーム看板広告、JR博多駅北改札口正面60インチマルチ画面(デジタルサイネージ)等でも公開を予定していますので、是非ご覧ください。



国語以外は苦手な子が小説家になるかもしれない。  
ノートにらくがきしてばかりの子が画家になるかもしれない。  
チョウやバッタにしか興味のない子が100年後の絶滅種を減らすかもしれない。  
ケガの多いやんちゃな子が多くの命を救う医者になるかもしれない。  
インターネットばかりしている子が平和を創るプログラムを発明するかもしれない。

その可能性を広げる。

教師は、  
世界を変える仕事だ。

あすの教育に、夢を。



国立大学法人  
福岡教育大学  
University of Teacher Education Fukuoka

[www.fukuoka-edu.ac.jp](http://www.fukuoka-edu.ac.jp)

Joyama 通信 vol.42

福岡教育大学広報誌第42号 2018年7月20日  
編集発行: 国立大学法人 福岡教育大学 経営政策課

〒811-4192 宗像市赤間文教町1-1  
TEL.0940-35-1205 FAX.0940-35-1259  
e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp  
ホームページ: <https://www.fukuoka-edu.ac.jp/>



福岡教育大学  
イメージキャラクター  
フッキー



携帯電話サイト



Twitter



YouTube

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。